

科学と社会委員会（第24期・第14回）議事要旨

1 日 時 令和2年9月11日（金）10:00～12:00

2 場 所 （オンライン開催）

3 出席者 渡辺 美代子（副会長・委員長）、小林 傳司（第一部会員・副委員長）、
小安 重夫（第二部会員・幹事）、高橋 桂子（第三部会員・幹事）、
遠藤 薫（第一部会員）、藤原 聖子（第一部会員）、西村 いくこ（第二部会員）、
松浦 純（連携会員・前第一部会員）、古谷 研（第二部会員）、
坪井 俊（第三部会員）、藤井 良一（連携会員・前第三部会員）、
沖 大幹（連携会員）、蟹江 憲史（連携会員）
（欠席） 甲斐 知恵子（第二部会員）、平井 みどり（第二部会員）、中村 崇（第三部会員）
（事務局） 船坂企画課専門官

4 議事要旨

第25期への申し送りに関する議論を主としつつ、大要次のとおり審議を行った。

（1）科学と社会委員会、同企画分科会提案に係る報告「学術とSDGsのネクストステップー社会とともに考えるためにー」について

- ・ 当初の時点では、章や項目間の統一性にやや欠けていたが、最終的にまとまりのある充実した報告書を公表することができた。
- ・ 査読者からは、外部要因（SDGsというスキーム）に研究の内容が規定されるという概念に関しての指摘があった。当該意見に関しては、次期への申し送り事項を審議する際改めて取り上げることとした。

（2）提言等の公表に当たり該当SDGを選定するプロセス、再考要請に対する対応について

- ・ 委員長より資料に基づき、日本学術会議ウェブサイトのSDGsコーナー上に、公表提言等を掲載する際のSDG該当項目の選定に関して説明がなされた。現状では科学と社会委員会担当の副会長が、17項目あるSDGs項目のうち、原則としていずれか1に当該提言を紐付けしていること、該当SDG項目選定の際には、SDG項目全体的の分布バランスにも配慮していることなどが説明された。

その上で、当該選定されたSDG該当項目について、提言等の策定元委員会等から再考要請があった場合の対応について本委員会委員間で次の議論が行われた。

- ・ 再考要請がされた場合、原則的には、策定元委員会の意向を尊重してもよいのではないかと。
- ・ また、提言等の内容によっては、該当SDG項目を一つに絞ることが難しいものが想定される。日本学術会議ウェブサイトへの掲載の仕方やロゴ表示を工夫して、主要な項目、次順位の項目など複数のSDGsに関係する提言であることを表現することも可能ではないかと。

（3）提言等意思の表出のページ数上限に関する規定について

- ・ 委員長及び事務局より資料3及び資料4に基づき説明が行われた。提言等の文章量の上限について、ガイドライン（資料3）では、「20ページ程度」とされていること、チェッ

クシート（資料４）では、「２０ページ以下」とされていることなどが紹介された。

また、幹事会の構成員より、提言等の分量制限について、提言等の論旨を十全に表現する必要があると判断される場合には、当該分量制限は緩和されても良いのではないかという意見が提起されたことが紹介され、委員間で次のような議論が行われた。

- ・ 提言等を作成する立場から考えると２０ページという分量制限は厳しい場合がある。そのような場合は、参考資料などで補っているが、それでわかりにくくなることもある。一方で、査読する立場の負担が増えることや、とりとめなく分量が増えることに対する危惧もあり、逡巡するところ。
- ・ 原則は２０ページ以下とする現行の制限を踏襲しつつ、幹事会審査の過程での意見により加筆せざるを得ない場合には、当該制限を超過することを容認してはどうか。
- ・ 理工系の場合は、図表等が多くなる傾向があるものと思料され、よって、図表を含めて２０ページという分量制限は、特異的に厳しいということはないか。
- ・ 制限があるからこそ、真に必要な図表類を吟味するということもあるし、文章の分量を図表で表現することで減らす効果もあり、理工系の提言だから分量制限が特異的に厳しいということはないものと思料する。
- ・ 策定する側からすると、分量の上限に収めるために、本来盛り込むべき事項であっても、査読過程で当然委指摘されると見込んで一定の論旨を省略する場合がある。査読側からすれば、こうしたことを追加的に指摘するより、分量が超過していたとしても逆に不要な部分を削っていく方が合理的な査読プロセスになるのではないか。
- ・ 日本学術会議のウェブサイトに掲載する際に、提言等の文章中の資料名等にリンクを貼り、当該リンク先に飛べるような工夫ができればいいのだが、サイト・ポリシー上できないと言われている。将来的に検討の余地はないか。
- ・ 章ごとに改ページを行うのがルールとなっており、紙幅を増やす原因になっているとする意見がある。一方で、現実には章が変わっても改ページしない提言等も多い。
- ・ 以上の趣旨、幹事会への提出段階では２０ページの制限を設け、幹事会での指摘に対応する段階では２０ページを越えても良いというについては、第２５期への申し送りに盛り込むこととする。

（４）第２５期への申し送り事項について

- ・ 先のSDGと提言等の関係のように、外的な要素により研究の内容が規定されとする危惧への指摘は重要だが、実際はそれほど一面的でなないのではないか。
関連して、ブダペスト宣言がよく引用され、知識としての科学を純粋科学と見なし、社会のための科学は工学系の学問を指すという様な理解があるが、子細に同宣言を読むと全ての学問が両方の側面を持つ、というのが同宣言の本来の趣旨である。
- ・ 本委員会委員就任当初は、外部の要素から独自の研究を色づけして欲しくない、という意見は自分も同感だった。しかし委員会での議論の中で、大学の各学科がSDGsに対応して設置されていることなどを知り、様々な議論を重ねる過程で認識を新たにした。
- ・ 社会の課題解決のための科学という視点でSDGsを捉えて、社会に対する学術の役割を議論する時にSDGsを持ってくると、しっくりと納まる。
- ・ 先の東日本大震災の際にも痛感し、今回の新型コロナウイルスによる様々な社会的現象を経験して改めて感じたことであるが、科学と社会という視点で考えた時に、「学術は本当に社会から求められているのだろうか」という問いがある。次期においては、学術会議が社会の中にどう受け入れてもらえるのか、という点を議論の端緒にしてはどうか。
- ・ 人種問題など社会で現実に行き起きている問題について、科学、なかんずく学術会議がどう向き合うべきかとうことを議論する場があってもいいのではないか。欧米ではこうした問

題について科学者コミュニティが積極的に議論していると聞く。

- 社会に対するアウトリーチについて指摘したい。新型コロナのために、学術会議の活動においても、様々な側面でオンラインが急速に進展した。これによりシンポジウムなどは、集客力も向上し、良い効果を生んだが、更に踏み込み、シンポジウムをアーカイブ化し、知の集約と総合を目指すことや、SNS のデザインなどについて、お役所的なものから脱却し、個性を表現することなどを議論してはどうか。
- ビジネスや産業など社会からの要請に基づく科学でないと役に立っていないとする議論があるが、一方で知のための学術も社会との関わりにおいて重要。こうしたことを学術の内から発信することも重要。
- 本委員会の委員構成について、この委員会の本来のミッションが委員間で共有されていなかった面があるように感じている。科学と社会委員会の役割として、提言等の査読を行うことが主な使命であるような前提で委員推薦がなされたことに起因するものと思料する。以前はそうだったかもしれないが、現在の本委員会のミッションは科学と社会の関わりについて学術の視点で議論を行うことにシフトしている。

そうした観点から、次期においては、まずコアメンバーを選出して、委員会の議論の方向性・ミッションをまずは十分に議論、当該議論の方向性にふさわしい人材を委員に委嘱するという方法で委員会を構成することが望ましい。

そうすることにより、様々な分野の研究者とより多様で広がりのある議論が可能となるのではないかと。

この点については、幹事会に提案し意見を聴取する。

- 新型コロナという事象に対して、学術の世界が向き合うということを切り口として議論を行い、意識を深めるという方向性も考えられる。

グローバルな社会、国を超えた世界と学術の関わりを考える上で、新型コロナが大きな端緒となったことは大事な論点

- 欧米などでは、新型コロナの発生に際し、当初マスクの着用に懐疑的な論調が科学者の一部にあり、信頼を失った。2月時点と、現在では研究者の発信している内容が異なることに対してジャーナリストなどが批判するが、本来科学とは研究が進むにつれて内容が更新されていくというダイナミックな性格のものであり、そこがきちんと理解されていないことが問題である。
- 東日本大震災の際と同様のことが起きた。専門家とそれ以外の人々との対立という構図である。
- 社会への発信という観点から、特に地方の高校生や高校の先生への学術からのアプローチということも、科学と社会という関わりにおいて重要。
- サイエンス・コミュニケーターについては、一定の人材や活躍の場があるが、近年、サイエンス・インタープリターが必要になっているように思う。そうした人材が職業として安心して活躍できる場を希求していくことについて議論されても良い。
- 所属機関において、アウトリーチ活動を継続して10年ほど続けている。市民講座のようなものは、こちらの伝えたいことは伝えることができるが、聴衆、なかんずく社会の側が知りたいことに十分応えられない。そうした観点から研究の現場にジャーナリストに来てもらい、一ヶ月など一定期間滞在してもらい、彼らを通じて発信してもらおうプロジェクトをやっており一定の効果があったものと考えている。
- ジャーナリストと科学という視点では、最近のジャーナリストの科学に対する知見が必ずしも十分ではないように思えることを危惧している。科学者と共通の科学的基盤に立って議論をすることが難しいように感じることもある。
- 今期においては、科学技術会議との密接な関係構築が進展したものと感じている。

一方、学術を規定する法律としては、科学技術基本法が唯一あるのみで、同法では、学

術の重要性は表現されているものの、産業等の側面が強調されたものとなっている。

- 提言等を日本学術会議のパブリック・リレーションズ、広報のためのツールとして考えるということも一考。読み物として面白い提言等があると良い。
- サイエンスカフェについては、大変熱心に行われたが、予算や会場、コストパフォーマンスなどの問題がある。オンラインの活用による広がりが考えられる。

以 上